

箱根寄木細工雑感

県立西湘高校 山本明利

私の勤務校の西湘（せいしょう）高校は、箱根の玄関口、小田原市にあります。その箱根の旧東海道沿い、畑宿（はたじゅく）には江戸時代から続く伝統工芸の箱根寄木細工の工房が集まっています。

寄木細工ではまず色や木目の異なる複数の角材を緻密に寄せ合わせて接着し「種板」を作ります。四角や三角を基調とした幾何学文様の下地を作る根気のいる工程です。用材は堅さや乾燥度が大きく異なると加工の障害となったり後々狂いの元になるので組み合わせに気を配るそうです。

寄木製品は、製造工程により大きく2種類に大別されます。ひとつはこの種板を大きな匏（かんな）で薄く削って「づく」と呼ばれる匏紙を作り、小箱などに貼って装飾とした「づく貼り」という工法によるもの。秘密箱などの箱物や、茶筒などの筒物が代表的です。

もう一つは、種板をそのままろくろや旋盤にかけて香合や菓子器などの立体を削り出す「むく作り」の工法によるもの。「づく」は同じ模様を何枚も量産できますが、「むく」は削られて無駄になる部分が多いので一般に高価です。

写真は畑宿の寄木会館に近い「ききょう屋」で求めたむく作りのぐい飲みです。1



辺3ミリの茶色と白の角材を多数寄せた種板から削りだしたものです。曲面上に思わぬ模様が現れるのが「むく」の楽しみです。曲面の微妙な削り方で模様が大きく変化するので、全く同じ物が作れないのも「むく」の値打ちです。



右の写真のように、旋盤の回転軸に平行な方向から見ると、もとの「種板」の様子がよくわかります。これだけの数の細かい角材を接着して固め、そこからさらに加工をする工程を想像すると、値段に見合う価値が納得できます。

ところで、このぐい飲みの茶色と白の境界線をたどっていくと楕円のような曲線になっていることに気がつきます。この曲線は種板のある層とその次の層の境目ですから、ひとつの平面上にあります。つまり、表面に現れているこれらの曲線群は、ぐい飲みという立体を3ミリ間隔の多数の平面でスライスした切断面になっているのです。

それはまた「等高線」と見ることもできます。等高線は「高さの等しい所をたどった線」ですが、地形を等間隔な水平面で切断した切り口でもあるからです。この場合、地図の等高線と違うのは、縦横垂直に交わる二組の平面群による切断面が観察できることです。

このように、むく作りは平面で構成される立体よりも曲面をもつ立体を削り出す方が断然面白みがあります。ぐい飲みに酒を注ぎながら、「この幾何学模様の観察から容積が概算できないだろうか。」などと考えをめぐらすのもまた一興ではないでしょうか。え？酒がまずくなるって？



※寄木細工について詳しくは、小田原箱根伝統寄木協同組合のWebページへ。

<http://www.ashigara-insatsu.com/hakone-yosegi/>

(下はききょう屋のチラシ)



伝統的工芸品

箱根寄木細工

箱根寄木細工は、種類の多い木材のそれぞれが持つ異なった材色や木目を生かしながら寄せ合わせ精緻な幾何学模様を作り出し一定厚みの「種板」とし、これを特殊な大鋸で薄く削り小箱などに貼布、装飾に利用したりします。この紙状のものを「ツク」と呼んでいます。又、厚みのある寄木種板をそのまま加工し製品によることを「むく」と言います。

この技術技法は江戸時代末期に箱根畑菅に始まり現在まで技術継承がなされ、箱根地方が我が国では唯一の産地であります。

当店「ききょう屋」では「むく」製品を主に製造販売しており、ご愛用をくださる様お願い申し上げます。

◆ お手入れ法

表面のほこりを払い柔らかい乾いた布でふいて下さい。
(ぬらしたり、直射日光にあてたりするご細工にへんが生じますのでお避け下さい。)

◆ 箱根寄木細工の主な用材

白色系……………あおはだ、まゆみ、みずき
黄色系……………にがき、はげの木、つるし
茶色系……………えんじゆ、さくら、けやき
褐色系……………けやし神代
灰色系……………ほおの木
黒色系……………かつら神代

寄木製造直売店(寄木会館駐車場前)

ききょう屋

神奈川県足柄下郡箱根町畑菅一〇四

電話〇四六〇(八五)七九〇二

細工所 電話〇四六〇(八五)七七九三

FAx〇四六〇(八五)七七九五